

12月1日

愛の讃歌

(コリント前書13: 1-13)

縦^二い、また、私に預言する力があり、總ての秘義と總ての知識とに通じ、山を移す程の全き信仰があつても、もし私に愛がないなら、私は空しい。愛は寛容であり、愛は情け深い。愛は妬まない、愛は誇らない、高ぶらない。愛は總てを荷いぬき、總てを信じぬき、總てを望みぬき、總てを耐えぬく。愛は断じて滅びない。しかし預言はすたれ、異言はやみ、知識もすたれる。そういうわけで永遠に存^三へるものは、信、望、愛の三者である。これらの中で最大なるものは愛である。
(コリント前書一三・二、四、八、一三)

使徒ペテロが希望の人であるなら、使徒ヨハネは愛の人であり、パウロは信仰の使徒である。しかしパウロはこの第十三章で愛の讃歌を詠っている。

彼は第十二、十四章で聖霊の賜(カリスマ)のことを詳しく語っている。その中を割つて愛を詠っている。この愛は聖霊から臨んで来た愛で、愛を人格化して語っている。愛・信・望は不可離の關係にあり且つ三相一如である。信は十字架のキリストの愛を信受することであり、過去の歴史的啓示的事実に基づくものである。望は終末的将来に対する希望であるが、愛はキリストという永遠の主体、終末的現在のキリストのみ霊を源泉とする極めて現在のなものである。聖霊の愛はわが衷なる愛となつて、愛の力が溢れてくる。

12月2日

復活の讃歌

(コリント前書15: 1-58)

血氣^{四四}の体にて播^まかれ、靈の体に甦^{よみがえ}へらせらる。魂体ある如く靈体あり。録^{四五}して始の人アダムは、生命ある魂となれり、とあるが如し。而して終のアダムは、生命を与ふる靈となれり。(コリ前一五・四四、四五。)

使徒行伝第九、第二二、第二六章で証言しているように、パウロは復活のキリストに靈撃され、聖靈のバプテスマにあづかり、十字架の贖罪を全身で受け、旧き我に死に、新しき我に復活せしめられた。であるから、パウロにとって、十字架、復活、聖靈は全く不可離の体験で、「もしキリストが復活しなかったら伝道も信仰も空しい」(コリ前一五・一四)と叫んでいる。この十五章は復活の讃歌を称して可い。

このキリストの復活の靈生を生命として生きているのがキリストの生命で、その値は愛である。神の愛なき生命は永遠であり得ない。永遠性を有っているものはこの愛だけである。しかもあらゆる愛は本来神からの愛だ。それを「神からの」という自覚を失ったところに多くの乱れが生じた。さて「血氣の体」とは原語の「ソーマ・ブスーキコン」の日本語だが、直訳すれば「魂の体」であって、これは地的である。なお、「靈の体」は「ソーマ・ブネウマティコン」で聖靈を宿した体で、永遠性をもった天的なものである。キリストの復活は正に血氣の体が、始から聖靈を宿していたから靈体に化して出現したのである。これは即ち「終のアダム」で我々に「生命(永遠の)」を与ふる靈」と成り給うた。パウロは一五・四六―五八に互り、復活の凱歌を挙げている！

主^{一七}は即ち御靈^{みたま}なり、主のみ靈のある所には自由あり。我^{一八}らは皆面^{かほ}帕^{おほひ}を除かれて鏡に映る如く主の栄光を見、主のみ靈によって、栄光より栄光へと進み、主と同じ相^{すがた}に化^{くわ}するなり。(コリ後三・一七、一八)

パウロはこの第三章で、我らは「活ける神の御靈で録されたキリストの手紙」(三・三)だといっている。正に文字通りの活字なのである。だから本当に地上をみ靈の自由に在って生きるなら、その生活そのものが不立文字で天界に記されている。人がどう思うこう思うではない。人の毀誉褒貶如何にもあれ、「キリストの手紙」とならんことのみ。

また彼は「儀文は殺し、靈は活かす」(三・六)といっているように、聖書も書かれたグラマであるが、聖書は聖靈で書かれた書だから、聖靈の光と生命と愛で読まなかったらパウロの言う「儀文」にしてしまう。読んで力が来るのでなければ靈の書として読んでいないことになり、所謂「聖書研究会」的な読み方ではダメである。聖書をよむことが直ちに力となり、愛であるような身読が大切。聖書は眼で聴き、体で受けとる書だ。

右掲の聖句は全くすばらしい。聖靈は天的自由を与える。空を飛ぶ鳥には道がないが、あれが自由の道である。「われは道なり」と言ったイエスは正にこの自由の道であった。キリストの中に全身で祈り入るとキリストの光を浴びる。実は鏡に映る以上に主の栄光に目がくらむ。光に貫かれて栄光化されてゆく。その人はその人らしくして、本質に於てキリストの相に化せられてゆく。

12月 4 日

神・キリスト一点張り

(コリント後 4 : 5)

○我ら^七この宝を土の器に^も有てり。われら^ハ四方より患難を受くれども窮せず、為ん方尽くれども希望を失はず、常にイエスの死を我らの身に負ふ。これイエスの生命の我らの身に現はれんためなり。(コリ後 四・七一〇)

○我らは知る、我らの幕屋なる地上の家やぶるれば、神の賜ふ建物、即ち^三天にある、手にして造らぬ永遠の家あることを。(五・二)

○我ら^三もし心狂へるならば神の^四為なり。心慥^{をか}ならば汝らの^三為なり。キリストの愛我らを抱けり。

○神^三は罪を知らざりし者を我らの代りに罪となし給へり。これ我らが彼に在りて神の義となるを得んためなり。(五・一二、一四、二二)

○この宝とはみ霊のキリスト(天的な器)、我々は正に土器(地的な体)。我らはキリスト主体の存在であるから力が神から来る。四面楚歌であつても、孤軍万軍!

○この「幕屋」はこの肉体のこと。「永遠の家」とは永遠の生命を宿している霊体のこと。○神・キリストのためには世人に気がおかしいと思われるくらいひたむきに生きよ。霊の戦をなせ。しかし対人関係に於ては健全な理性も感情もあり。これが霊的人格というもの。キリストの愛につながり、抱かれ、圧倒されて生きよ。日々是れ樂園である。

○キリスト・イエスは我らの為に罪人の首となり、罪をひきうけ、義を我らに賜うた。

12月5日

無一物無尽蔵

(コリント後書6:1-18)

我らは人を惑はす者の如くなれど眞^{まこと}。死^しなんとする者の如くなれど、視よ、生ける者。憂^{うれ}ふる者の如くなれど常に喜び、貧しき者の如くなれども多くの人を富ませ、何も有^もたぬ者の如くなれども凡ての物を有^もてり。(コリ後六・八……一〇)

天来の真理は観念的ではない。常識や理性を超えた次元であるので、人を惑はすことが大いにある。だけれども霊的な現実をからだで受けとってみると、これこそ本当だということがわかる。棄身の行為だから死ぬのかと思われるが、どっこい生命力が旺盛である。世を見ると正直憂苦に耐えない。だが哀なる世界では天的な歓喜の中にいる。正直貧しい。米と沢庵と味噌汁と豆腐と卵といったもので生きている。人を豊かにさせて喜んでい。何も食べ物に限らない。一切は神の有である。土地こそ国有にして神有だ。日本の土地問題は馬鹿気きっている。こんな政治があるか。右掲の文でパウロは「ホース」(如く)と言っているが、一種の修辭で、實際そうだが、しかし、といった語調であり、内容である。最後の句は正に無一物無尽蔵に当る句だ。キリストが正にそうであった。神のほか彼には何もなかった。神から無尽蔵なものが来た。そしてそれをみんな人々に頒けて限りない。今もその無尽蔵を下さる。何か、聖霊である。一なる小池を零(無)にし給うは十字架である。すると無尽蔵なる聖霊が与えられる。1011という数学と同じだ。禅宗の第六祖廬能が人間「本来無一物」と喝破した。その彼に如来の力が臨んで法衣にまで靈力がかかったパウロと同次元。

12月6日

鴻大なる黙示

(コリント後書12：1-13：13)

○我^セはわが蒙^{こうむ}りたる顯示の超絶なるによって、高ぶることの無からんために肉体に一つの刺^{はり}を与へらる。即ち：我を撃つサタンの使なり。我^ハれがこれのために三度びまで之を去らしめ給はんことを主に求めたるに、言ひ給ふ「わが恩恵汝に足れり。わが力は弱きうちに全うせらるるればなり」。然ればキリストの力の我を疵^{きず}はんために、寧ろ大いに喜びてわが弱きを誇らん。(コリ後二・七一〇)

この後書第十二章の始めに、パウロには十四年前に「第三の天」に取り去られた特別高次の靈的体験を受けたことを語っている。そこはパラダイスであった。彼がいかにキリストと一如の実存であるかを知る。彼はそれを「超絶なる顯示」といつている。旧訳に「鴻大なる黙示」とある言である。こんな靈的体験がなくても、我々は地上で、本当にキリストの中に生きているときは、それは質的に「第三の天」である。天地融合の境地である。パウロは実に多種多様のカリスマに与っているし、福音の内容は古今独歩的である。全く超絶にして鴻大なる黙示を受けた人物だ。それに驕らないために肉体に刺^{はり}が与えられるという。しかもサタンの使だという。おのが「弱き」をこそ誇らんと言っている。人間パウロなる哉、筆者も「弱き」を誇るありがたさである。キリストの愛に圧倒されているのは、筆者も弱き人間だからである。「弱き」無者とされている。そこにもものすごいキリストの力が臨んで下さる。アーメン。

12月7日

十字架・聖霊の体受

(ガラテヤ1:1-3:14)

我れ神に生きたために、律法によりて律法に死にたり。我れキリストと共に十字架せられたり、最早われ生くるに非ず、キリストわが内に在りて生き給ふなり。今われ肉にあつて生くるは、我を愛してわがためにおのれ自身を棄て給ひし神の子への信交に在りて生くるなり。(ガラテヤ二・一九、二〇)

このガラテヤ二・二〇はプロテスタント信仰の金科玉条ともいふべきものであるが、これが一般に観念信仰になっていること、「信仰によって義とされる」を信仰義認といった言い方で納得している事態と同軌である。さてまず十九節の意味は何か。パウロはサウル時代に律法を行じて義人であると自負していた。神意を念とせず、律法を他律的に遵っていたサウルは実は律法の根本精神を満たしているのではなかった。所謂道德屋が偽善であることはカントが道德哲学で指摘しているように、サウルも信仰の世界の偽善者であったからキリストが「偽善なる律法学者、パリサイ人」と責め給うたのである。神意ぬきのサウルは、律法に生きられなかった。聖霊を受けて、彼は自分の自己義認の罪がキリストの十字架で贖はれていることに気がついた。旧き我はキリストと共に十字架されていた。「キリストわが内に」とはキリストの聖霊である。キリストは天界に在り給うが、み霊なるキリストは、十字架のキリストを体受している限り、万人にいつでも入って来て下さる。これが霊界の神秘の現実である。だから十字架と聖霊は絶対不可離の關係にある。信仰はそのような全存在的具体的な体受であることを要する。

12月8日

無限無量なるキリストの愛

(エペソ 1 : 1-3 : 21)

○汝らは恩恵^{めぐみ}により、信仰によつて救はれたり。是れおのれに由るに非^{あら}ず、神の賜物^{たまもの}なり（エペソ 二・八）

◎汝らは使徒と預言者との基の上に建てられたる者にして、キリスト・イエス自らその隅^{すみ}の首石^{おおいし}たり。（三・二〇）

○父^{ちち}その栄光の富に循^{したが}ひて、御霊により力をもて汝らの内なる人を強くし、信仰によりてキリストを汝らの心に住^{すま}はせ、汝らをして愛に根ざし、愛を基とし、凡^{みな}ての聖徒と共にキリストの愛の廣さ、長さ、高さ、深さの如何許りなるかを悟り、その測^{はか}り知るべからざる愛を知ることを得しめ、凡て神に満てるものを汝らに満たしめ給はんことを。（三・二〇、三・二六-二九）

○恩恵とはキリストの十字架の贖罪と聖霊の自由な降臨で、キリストが恩恵の主体でこれを体受することが信仰（信交）で、神のはたらきかけによる賜物である。親鸞の「歎異鈔」にある「弥陀の御もように由る信」と同様である。二・二〇は旧約の預言者の預言、新約の使徒の証言が土台となっているが、キリストがその隅の首石たる根源である。我々信徒は「聖霊の宮」であるから、諸々の教会は夫々の特色をもちつつ大同である。

○三・一六以下は要するに父なる神キリストの愛の御はたらきにより、御霊の力が臨み、個人としても教會的集團としてもキリストの愛の身証、愛の展開を以て天国を現じてゆく。

12月9日

神・キリストの超在、遍在、内在

(エペソ 4: 1-16)

体^四は一つ、御^五霊は一つなり、汝ら召命への一つの望に在^六て召されたるが如し。主は一者、信仰は一つ、バプテスマは一つ、万人の父なる神は一者なり。神は万物の上に在^七まし、万物を貫^八き、万物の内に在^九まし給^{一〇}ふ。(エペソ四・四一六)(参照せよ、ローマ一・三六、コリ前八・六、エペソ一・一〇、ピリピ二・一〇、一一、コロ一・一五―一七)

パウロは雄大な気宇の人物である。それも聖霊が宿ったからであった。「体は一つ」とは有機体である体は非常な多の因子から構成されていて、どの一部分を欠いても血が流出すれば生命に関はる。一即多、多即一たる一である。「御霊は一つ」正に然り、宗派の如何に関はりない。しかも霊賜は多種である。「望は一つ」、然り、死と歴史の終末に来るべき新天地の神の国への大希望は一つである。主は一者、キリスト・イエスあるのみ、時満ちて神の経綸に従い、天上天下一切のものがキリストに在^二て帰一するのである。(エペソ一・一〇)。主体は救主キリストであるから、信仰は必然一つである。バプテスマは聖霊のバプテスマだから一つに決っている。キリストに因^三って拝跪する対象たる父なる神は一者。神は神秘なる霊なる實在だから、宇宙万物に超在し、万物に貫在、遍在し、万物に内在し給^四う。実にこれ以上の気宇があるか。(ローマ一・三六、コリ前八・六参照)。しかもキリストは、見得べがらざる神の像であって、万物に先在し、万物は彼によって創造され、天上天下の可見不可見のもの、彼によって成り、彼の為に在る(コロサイ一・一五―一七)。彼は救済の愛の主だからである(四・一五、一六)。

12月9日

(時) 新宗教改革 作詞1981. 5. 8
(エペソ 4 : 1-16) 歌調 S. 271 「いさをなき我を」

新宗教改革

1 いづれの教派も 夫々意味あり
ただ胸に在りや 砕けの十字架

2 いづれの集会も 観念不可なり
体當りせんかな 聖書の現実に

3 いづれの教派も 使命はそれぞれ
ただ胸に在りや いのちの聖霊

4 いづれの集会も それぞれ今こそ
祈り入りゆかん 使徒らの次元に

5 キリスト教界 形式を乗り越え
み霊に在りて 内面より改革！

6 キリスト教界 自由の心と
み霊の愛にて 世人を愛せん

7 キリスト教界 主と一つになり
み霊の力で まことの伝道

8 主イエスの奴婢ぞ み霊の火となり
預言者と使徒の後を継がん哉

12月10日

キリストの戦士たれ！

(エペソ 6：1-24)

終りに言はん、汝ら主に在りて、その大能の威勢に在りて強かれ。悪魔ディアボロス（誹謗者）の術に向ひて立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。我らは血肉と戦ふに非ず、政權、（金）權、この世の暗黒を掌る者、天空にある惡の靈どもと戦ふなり。汝ら立つに誠を帶とし、義を胸當とし、平和の福音の備えを靴とせよ。なほ他に信仰の盾を執れ、之をもて惡しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。また救の胄及び御靈の劔、即ち神の御言を執れ。（エペソ六・一〇一七）

パウロは靈界に君臨するこの世の君たるサタンとの戦を戦へと烈々たる士氣を以てロマの獄中でこの手紙を書いた。第二、第三次伝道で永く逗留した親しいエペソ教会の信徒への最後のよびかけである。エペソには女神アルテミスがいた（行伝一九・三一四〇）。その壮麗な神殿はアテネのあの巨大なバルテノンの四倍もある大神殿であったという。乳房をたくさんもっている多産の豊穡の象徴の女神像である。祭祀は官能的で聖娼という矛盾した女がいた。權勢と財富と酒色をあやつるサタンとの戦である。これはコリントに於ても然りであった。いつの世でも大都會はかのバビロンが歴史的な代表であったように類似する。黙示録にこのことが出現し、大なるバビロンに審判が降る。パウロは靈的な戦士の雄姿を具象的に語っているが、焦点は聖靈である。聖靈の人となつて、聖名に在つての御力で戦へというのである。「雄々しかれ、我既に世に勝てり」の主は護り給う。

12月10日

(詩) 福音の戦士 (エペソ書第6章に因みて)

作詞：1979, 12, 7

歌調：S. 169 「きけよやひびく」

福音の戦士

- | | | | |
|--------------------|------------------|-----------------|-------------------|
| 4 | 3 | 2 | 1 |
| み霊の子らよ
祈りて受けよ | 人の心に
利をのみ追はば | 心おごれる
混濁の世は | 時は来れり
民の在り方 |
| いかなるときも
主のみ力を | 愛のかげなく
崩れゆくなり | 昭和元禄
いつこへ往くや | 大和島根の
神に問はれん |
| 8 | 7 | 6 | 5 |
| 生くるは伝道
福音の証人たれ! | 主の義を鎧ひ
恵信一如 | 恵みの盾
聖言の盾 | いざや友らよ
世紀の終末 |
| いかなるときも | 希望に燃えよ
愛を帯びて | み霊の剣
武装はよきか | 主の武具を執れ
近づきたれば |

12月11日

無的実存と一切の秘訣

(ピリピ1:1-2:11; 4:8-23)

○汝^{二五}らキリスト・イエスの心を心とせよ。即ち彼は神の相^{すがた}にて居給ひしが、反^セつて己を空しうし、十字架の死に至るまで順ひ給へり。
 ○我^{四・三}は卑賤^{いやしき}に^おゐる道を知り、富に^おゐる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。我^三を強くし給ふ者によりて凡てのことをなし得るなり。

○パウロは、ローマで獄中書翰をいくつか書いた。著しいのがエペソ、コロサイ、ピリピだが、このピリピ書は最期のもので、謂はば遺言のようなものである。右掲前半の句はキリストの無的実存を魂をこめて語っている。神の相^{すがた}(モルフェー)とは何か、無相の相で、誰か知らんやである。次の大切な言は「己を空しうし」である。空しうする(ケノオー)は、無私の無となることで、彼の地上の実存は神に対して全く己が無かった。神一切であった。それを私は無的実存といっている。それが「エホバの僕」とイザヤが預言している相なのである。イエスはそのような無者として実存し、十字架の死にまで貫いた。完璧な神意体现の無者はイエスの他に一人も居ない。これを義人という。義は神意体现の相であり内実である。キリストの心とはこの無の相であり、十字架道である。使徒らはキリストの心を心として殉道した。旧訳「心を心とする」は原文通りではないが妙訳だと思う。
 ○パウロはいかなる運命環境にも処し得た。それは聖霊が有つ弾力性に由る一切の秘訣である。コリ前九・二〇―二三も、一〇・三一―三三も、コリ後六・三一―一〇も、一一・二三―三〇も、皆然りである。

12月12日

天地一如，萬物浸透

(コロサイ1-4)

○汝らもしキリストと共に甦へらせられしならば、上にあるものを求めよ。汝らは死にたる者にしてその生命はキリストと共に神の中に隠れ在ればなり。

○…この新人は、これを創造り給ひし者の像(かたち)(エイコーン)に循ひ、いよいよ新たになりて靈知(エピグノーシス)に至るなり。それキリストは萬物の中に在り。

○コロサイ書も獄中書翰であるが、彼の天的生命に溢れていることを見ても、いかに彼が聖霊の人であるかがわかる。パウロはよく「もし」という仮定的な言い方をするが、「もし、もしパウロさん」といって、天界のパウロに、「私も地上にありながら天界の次元に居りますから御安心」と応える。我々の生命は神・キリストを隠れ蓐としている。パウロも歴史の終末的現実にいる意識が強い。我々はずっと終末的現実にある。

○樂園喪失の現実がありながら、キリストのゆえに樂園回復の終末的現実を我々は生きている。聖霊の力によって新創造の人間にされた。靈知が臨んで、所謂国境はない。日本人という特殊性を有しながら世界人、宇宙人である。キリスト・イエスはユダヤ人でありながら、その民族の特殊性を突破した本当の人間であり給う。万物に浸透している大実存だ。我々も破れ器ながら然か^ニ在り得る、聖霊の力で、アーメン。

12月13日

絶えず祈る、御霊を熄けさない。
(テサロニケ前書 5 : 1-28)

常に喜よろこべ。絶やえず祈これ。万ばん事に感謝せよ。これキリスト・イエスに在ありて神の汝なんらに求め給ふところなり。御霊みたま(の火)を熄けすな。預言よめを蔑なすな。きよき接吻くわふんをもて凡ての兄弟に挨拶せよ。願ねがはくは主イエス・キリストの恩恵汝らと偕いっしょに在らんことを。(テサ前五・一六……二八)

このテサロニケ前書なる公の手紙は、第二次伝道の際、テサロニケ教会にコリントから書き送ったもので、パウロ書翰の現存の最初のものである。四・一三—一八では特に再臨のキリストを希望しているのが、いかに使徒たちはキリストを慕っていたことか。

右掲の短かい数連の言は我々の日常生活へのパウロの勧めとして深く銘記すべきものである。「常に喜べ」、これは可能か。どんな不如意のときでも、常に喜び得るか。そのためにはキリストをわが衷に迎えて、天国をわが胸三寸の中に現することによって可能である。「絶えず祈れ」は、魂が祈りを呼吸とすることによって可能である。エン・クリスト！キリストの中にいる態勢が、祈らざるを得ないようにする。祈りがたのしみとなる祈りが力となる。そのとき不断の祈の魂となる。「万事に感謝せよ」、悲しいこと、口惜しいこと、憤慨に耐えぬこと、その他感謝できないようなときにも、魂をキリストに向けると、聖霊が臨み、あらゆる逆境に在って、逆に聖霊の力が強化されて感謝せざるを得なくなる。これが本当の勝利である。「御霊(の火)を熄すな」魂の目をキリストに向けると、聖霊の火が燃える。聖霊の火は消えない。「預言」を受けるには祈りを要す。「きよき接吻」主に在っての愛情は生命を若返らしめる。

12月14日

罪びとの首、使徒の首
(テモテ前、後書全部)

○「キリスト・イエス罪人を救はんために世に來たり給へり、とは信ずべく正しく受くべき事ぞ。その罪人の中にて我は首なり」。

○この故にわが按手に由りて汝の内に得たる神の賜物をますます熾にせんことを勧む(テモテ後書一・六)

○我はこの福音のために苦難を受けて悪人の如く繋がるるに至れり。然れど神の言は繋かれたるに非ず。(テモテ後書二・九)

○我は今供物として血を灑がんとす。わが去るべき時は近づけり。われ善き戦を戦ひ、走るべき道程を果し、信仰を守れり。

○テモテ前・後書はテトス書と共に牧会書翰と謂われている。パウロが愛弟子テモテ(父はギリシヤ人、母はユダヤ人)に与えた私信。パウロは自分を「罪びとの首」と告白した。キリスト信徒を殺害したことを意識しての言であらう。しかし殉道者ステパノの故に、パウロは救われた。ついに彼は使徒の首となった。これほど美事な劇的な変転は類例がなからう。内村鑑三も自らを「罪びとの首」と告白し、万人救済論を唱えた。ところがキリストこそ「罪びとの首」と自らなり給うて、十字架の死を遂げ贖罪を果して下さった。○パウロによる聖霊の按手でテモテは恵まれた。この筆者もかなり多くの男女に聖霊の按手を施した。み霊を受けた後、聖言を化体してゆくことが大切である。そして十字架が土台になっていることを要する。十字架と聖霊は不可分である。

12月15日

聖霊の維新

(テトス 3:1-11)

三・四
 されど我らの救主なる神の仁慈と人を愛し給ふ愛との顯はれしとき、
 五・六
 我らの行ひし義の業にはよらで、唯その憐憫により、更生の洗
 ひと我らの救主イエス・キリストをもて豊かに注ぎ給ふ聖霊の維新
 とにて我らを救ひ給へり。(テトス三・四―六)

テトスはギリシヤ人(ガラテヤ二・三)でパウロによって入信した。パウロの伝道に同道して協力した。特にエベソ教会、コリント教会との交りがあつた(コリント後書二・二三、八・二三、一二・一八)。その後テトスはクレタ島で伝道をして、島の中心人物となつた由。

右掲の聖句で著しい語は「聖霊の維新」である。キリストが「人新たに(上より)生れずば神の国を見ること能はず」(ヨハネ三・六)と言い、更に「人は水と霊とによりて生れずば、神の国に入ること能はず」(ヨハネ三・五)と言つておられる様に、ここで言う「更生の洗ひ」とは水のバプテスマ即ち悔改、回帰の水のバプテスマのことである。が大切なのは、「キリストから豊かに注ぎ来たる聖霊」のバプテスマである。聖霊を本當に受けるとその瞬間から別の次元に入ったことを覚える。これは体験するのでなければわからない。正に「聖霊の維新」である。いつかも告白したように、筆者も一九五〇年の晩秋、大阿蘇山のふとこで、即ち瀧見荘での祈禱会に於て、十字架の冥想を祈りの中でしているうちに、天界から聖霊が注がれた。全身がしびれた。これが私にとって、信仰生活二十七年にして、起きた聖霊による維新であつた。魂の遍歴における大なる峠となつた。

12月16日

神の大祭司キリスト
(ヘブル3-8)

四・二五

我らの大祭司は我らの弱さを思ひやること能はぬ者に非ず、罪を外^{ほか}にして凡ての事、われらと等しく試みられ給へり。この故に我らは憐憫を受けんが為、憚らずして恵の御座に來たるべし。

○このメルキセデクはサレムの王にて至高^{いとたか}き神の祭司たりしがアブラハムは彼に凡ての物の十分の一を分け与へたり。その名を訳^とけば、第一に「義の王」、次に「サレムの王」、即ち「平和の王」なり。父なく、母なく、系図なく、齡の始なく、生命の終なく、神の子と同類にして、限りなく祭司たり。(七・一二)(特に五・一一〇。参照)

このヘブル書の作者は多分パウロの弟子、多分レビにしてユダヤ教から改宗したヘレニスト(ギリシャ語を語るユダヤ人)。ギリシャ文体は非常に美しいとのこと。主題はキリストを独一の大祭司として述べていること。しかも十字架の信仰が土台となっており、聖霊の權威も瞭かである。謂はばゴルゴダの丘の上に円現した靈虹の如きものである。手紙か、神学論文か、福音の解明か、いづれをもふくむふしぎな一書である。

右掲の聖句を見ると、受肉のイエス、どん底に立つて我々の罪を十字架で荷い贖って下さったキリストの絶対恩恵に憚らずして浴せよ、という。メルキセデクという不思議な祭司(創世二四・二ハ一二)は詩篇一一〇・四に謳はれている彼で、イエスはこの彼を型として自覚しておられた。この七・三に至ってはいよいよ以てキリストの型の如くである。

12月17日

永遠の贖罪・永遠の嗣業

(ヘブル9:10)

九二
されどキリストは来らんとする善きことの大祭司として来たり、
手にて造らぬ此の世の属ならぬ更に大なる全き幕屋を経て、山羊と
犢との血を用ひず、おのが血をもて唯一度び至聖所に入りて、永遠
の贖罪を終へ給へり。……永遠の御霊により瑕なくして己を神に献
げ給ひしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為より潔めて活
ける神に事へしめざらんや。
二五

この故に彼は契約の中保なり。……召されたる者に約束の永遠の
嗣業を受けさせん為なり。(ヘブル9:11-15)

「されど」というのは、九・一一〇に述べてある旧約の礼拝(出二五、二六参照)に対して、
新約の霊的礼拝に移らんとするからである。一二節「唯一度び至聖所に入りて」とは何か。
十字架のことである。十字架の贖罪死こそ「永遠の贖罪」で、イエス自ら大祭司となり、
羔となって十字架という極刑台を至聖所と化した。東西古今唯一の至聖所で、永遠の贖罪
を果し給うた。キリストの霊は今も尚現在して能き給う、十字架が今も尚現在して我らに
現前する事実である如く。これが「永遠」の活現性である。旧約から新約への中保となっ
て旧約を成就して贖罪し、新約たる永遠の嗣業、即ち神の国を嗣ぐ者として下さった。そ
の実質は何か。聖霊の降臨を受けて、聖霊の人となることである。これは十字架の絶対恩
恵を無条件に体受するところに臨む絶対恩恵の聖霊であって、こちらに何の条件も資格も
要らない。

12月18日

慕ふところは天に在り
(ヘブル11: 1-40)

○信仰は望まれおるものの現実、見られざるものの確証なり。信仰に由りて我らは、諸々の世界の神の言にて創造られ、見るものの願はるるものより成らざるを悟る。信仰に由りてノアは、……畏みて……方舟を造り、……信仰に由る義の世嗣ぎとなれり。信仰に由りてサラも約束し給ふ者の信実なるを思ひし故に、年過ぎたれども胤を宿す力を受けたり。

○彼らは皆信仰を懷きて死にたり。未だ約束のものを受けざりしが、遙かにこれを見て迎へ、地には旅人また寓れる者なるを言ひ表はせり。されど彼らの慕ふ所は天に在る更に勝りたる所なり。

信仰はこちらの何ものでもない。主体的対象から受けとる希望の現実であり、不見の主体的対象が何らかの徴として受けとられている確証である。信仰現である。これは聖霊のわざである。「天国は汝らの内に在り」と言い給ふた聖言が裏づけて下さっている。神の霊言、霊気が万象を現じ出だす。山の上に方舟を造っていたノアは氣狂いと思はれたろう。ところが方舟は信仰の現実であり確証であった。見よ、大洪水が襲来して方舟のみが救はれた。サラも常識を超えた老年で胤を宿した。約束のものの保証は信仰が抱く聖霊である。靈賜である。天界には神が天の都を備へておられる(一一・一六)。内なる天国は、外なる天国の保証であった。

12月19日

陣営より出でて御許へ

(ヘブル13: 1-25)

大祭司^{三三}、罪のために活物の血を携へて至聖所に入り、その活物の体は陣営の外にて焼かるるなり。この故にイエスも己が血をもて民を潔めんがために門の外にて苦難を受け給へり。

されば我らは彼の恥を負ひ、陣営より出でてその御許に往くべし。

旧約時代の大祭司は羔の血を携へて神殿の幕屋の至聖所に入り、血を祭壇に溅いだすが、羔(牡牛と山羊)の体は陣営の外で焼かれた(レビ記一六・二七参照)。イエスはエルサレム城門外のゴルゴダで十字架され給うた。「彼の恥」とは十字架道のことである。陣営とはこの場合ユダヤ教であろうが、我々にとっては神を無みする徒輩であつたり、同じキリスト者でありながら、自己義認をして他人を審くパリサイであつたりする。そういう陣営から出でて、キリスト直結のため許へ往くのが天道である。四面楚歌の声であらうと結構だ。天の万軍が味方する。預言者たちや使徒たちが応援する。筆者自身もそういう経験をもつた。数十年独歩して来た。先生や先輩や友人や弟子からも見棄てられた。自己弁護は要らない。聖霊が呻きを以て執り成し給ふ。わが真意と善意は主が知り給う。「わが義は天に在り」である。「陣営より出でてみ許に往くべし」の一句は身に泌む。ありがたい聖言だ。万斛の涙を知り給う主の故に。もう人生の夕暮だ、詩の旅路である。夜道を独りで辿つてゆく。夜もすがら歩く。主のカンテラ聖霊の光で。永遠の晨が明けるまで。み空に星が三つ輝いている。D・M・G! わがオリオンよ!

12月20日

本来信・行一相一如
(ヤコブ書全体)

一・二三

○それみ言を聞くのみにして之を行はぬ者は、鏡にて己が生来の顔を見る人に似たり。されど全き律法、即ち自由の律法を懇ろに見て離れぬ者は、業を行ふ者なり。(ヤコブ一・二三―二五)

○我らの父アブラハムはその子イサクを祭壇に献げしとき、行為によりて義とせられたるに非ずや。(ヤコブ二・二二)

○汝らの中の戦争は何処よりか、分争は何処よりか、汝らの肢体の中に戦ふ慾より来るに非ずや。(ヤコブ四・一、五)

「神は我らの裏に住ませ給ひし靈を妬むほどに慕ひ給ふ」と言へり。

キリストの義を賜るのはパウロの言う如く信仰のみによるのか、ヤコブの言う如く行為によるのか。信仰と行為をかく二段構えとするなら、パウロが正しい。しかし、信仰そのものが実は全身的霊的行為であって信仰行である。信とはキリストの恵みの力に圧倒されて起きる受動的行為、本願による行為である。信仰行で、まことの行為は信仰の現象面たるのみ。火が燃えれば炎が立つように。どんなにそれが惨めな相であつても。故に行爲(炎)なき信仰(火)は偽信仰(くすぶり)である。かくてパウロ、ヤコブは真理の表裏であつて本質的には一相であるはずだ。「自由の律法」とは天的必然、靈然の法で、行為せざるを得ぬ法である。「慾」は要するにエゴイズム(利己主義)でこれが罪の根だ。神・キリストの愛は我々の靈がサタンに奪はれぬように慕つて下さる。

12月21日

愛と栄光の聖靈
(ペテロ前書 4 : 1-19)

○万事万象の終末近づけり。然れば汝ら心を鎮め、深く祈り入れよ！ 何ごとよりも先づ互に相愛せよ。愛は多くの罪を掩へばなり。○愛する者よ、汝らを試みんとて来れる火の如き試煉を異なることとして怪しまず、反つてキリストの苦難に与れば与るほど喜べ、汝ら彼の栄光の顯れん時にも喜び樂しまんためなり。もし汝らキリストの聖名のため謗られなば恵福なり。栄光と御霊、即ち神の御霊汝らの上に留まり給へばなり。(ペテロ前四・一二、一三、一四)

紀元一世紀後半から二世紀初葉にかけてのネロ、ドミティヤヌス、トラヤヌス帝らの迫害を背景とした初代キリスト者たちの生命賭けの信仰をこのペテロ前後書翰に於ても見る。世の終末は人間世界の現実の相である。神が世界の終末をいつ終わらせても、人間の側に弁解の余地はない。審判に堪え得るものは、十字架でゆるされたその愛と同質の愛を以て他人の罪を掩う愛のみである。「火の如き試煉」とは迫害のことで、キリストが十字架の苦難に勝ち給うたのは聖霊の愛の力であった。ペテロも主の跡を追って逆さ十字架の苦難に勝った。パウロも、主の兄弟ヤコブも殉道の死を以て凱旋した。旺なる聖霊に生きる者には苦難の中にも歓喜がある。苦難に遭えば遭う程聖霊の力は増大してくる。聖霊は無敵の霊である。深く祈り入って聖霊の化身とならん。

12月22日

一日千年

(ペテロ後書 3 : 1-18)

三・八 愛する者よ、汝らこの一事を等閑にするな、主のみ許では一日は千年の如く、千年は一日の如くである。主その約束を果すに遅きは、ある人々の遅しと思ふが如きではなく、ただ何びとの亡ぶるをも望み給はず、凡ての人の回帰し来らんことを望みて、汝らを永く忍び給うのである。されど主の日は盗人の如く来らん。汝らいかに潔き行状と敬虔とをもて、神の日来たるを待ち、之を速かにせんことを勉むべきではないか。この日には天燃え崩れ、諸々の天体焼け溶けん。だが我らは神の約束によって義の住む新天新地を待つのである。

「一粒の砂の中に宇宙を觀、一茎の野草に大空を觀じ、君の手の掌に無限を握み、一刻の中に永遠を有つ」とブレイクが詠った。正にその如く主のみ許では一日は千年であり、千年は一日である。主が永遠の実存で在り給うから、主と偕に、主の中に在る者にとつては一日は永遠性を有っている。三六六日、一年のどの一日も永遠である。千年とは永遠のことである。万人救済の悲願、本願を有ち給う主が、人々の神への回帰を待つて居られる。神の義の日が輝いているところの、また主の愛の源泉が湧いているところの新天新地を待つには、自ら「清き行状も敬虔」も意識せず、ひたすら聖靈の恩沢にあづかり、大自然の如く靈然たるの生き方を以て信より信へ、望より望へ、愛より愛へと生きるのみ、合掌。

12月22日（其一）

（詩）一日千年 作詞1979. 12. 16

歌詞：S260B「千歳の岩よ」

一日千年

- | | | | |
|--|--|--|--|
| 4 | 3 | 2 | 1 |
| 大和島根の 人よ醒めよ
古来われらは 道の民なり
今こそ受けよ キリストの道 | 世紀の終末 近づきたれば
心を裂きて 神に帰れよ！
三次大戦 いつかは知れず | 剣を執れば 剣に亡ぶ
萬づの国は 自滅への道
ああ人の世の 罪を果てなき | 神を無みして 萬づの事を
いかに謀るも 空の空なり
ああ亡びゆく 文明文化 |
| 8 | 7 | 6 | 5 |
| 歴史の終末 明日に迫るも
主にごそ在りて 人を愛し
今日一日を 千年と生さん | 人はもと霊止 神仏なり
萬象帰一 物心一如
萬づの人よ 相抱けよや | 幼児どもに 国境なし
イデオロギーの 限界を悟り
人間に帰りて 手を握り合へ | 預言者どもも 主の使徒たちも
亡びゆく世に 真理の道の
証しを立てて 世を去りゆけり |

12月22日（其二）

（詩）世紀末 作詞：1980. 1. 18

（ペテロ後書第四章に因みて） 歌調：S 513「あめにたから」

世紀末

1

世の終末は 近づきたり
心こめて 祈らん
主に在りてぞ 世をば愛し
聖国の民を 創造らん。

2

火の試煉 近づきたり
キリストの名のため
譏られなば 幸なり
み霊うちに 燃ゆれば

3

み霊による たまものをば
惜しみなく ほどこし
魂の宝 天に積みて
聖民の証示をせん

12月23日

永遠の生命たる言 ロゴス
(ヨハネ第一書 1:1-3:24)

○元始より在りしもの、我らが聞きしもの、目にて見しもの、つら
つら見て手触りしもの、即ち生命の言に就きてなり。この生命すで
に顕はれ、我らこれを見て証をなし、そのかつて父と偕に在まして
今我らに顕はれ給へる永遠の生命を汝らに告ぐ。(ヨハネ一書一・一、二)
○汝らの衷には、主より注がれる油留まる故に、人の汝らに教ふる
要なし。この油は汝らに凡てのことを教へ、かつ真にして虚偽なし、
汝らはその教へし如く主に居るなり。(三・二七)
○主はわれらの為に生命を捨て給へり、之によりて愛を知りたり。
我らも亦兄弟のために生命を棄つべきなり。(三・一六)

このヨハネの第一の手紙は、その出だしがヨハネ福音書の冒頭に照応する。
即ちそれは言であつてしかも生命である。この言なる主体はヨハネが耳で聞き、目で見、
手で触ることの出来た慕はしい人物であつた。この人は父なる神と偕に先在し、地上に肉
体を以て出現し給うた。それは永遠の生命の実証者たる主イエスである。「主より注がれ
た油」とはペンテコステのとき降臨した聖霊のことである。み霊が臨むと私の言ったりし
たことがみんなわかるぞ、とイエス自身が遺言なさつた。「主に居る」とはヨハネ福音書
第十五章でイエスがさんざん語っておられる表現である。主と一如的な在り方である。
三・一六はヨハネ福音書の三・一六と相照応するではないか！

12月24日

愛は神より出づ
(ヨハネ第一書 4 : 1-21)

四・七
愛する者よ、我ら互いに相愛すべし。愛は神より出づ。凡そ愛ある者は、神より生れ、神を知るなり。愛なき者は神を知らず、神は愛なればなり。神の愛われらに顯はれたり。神はその生み給へる独子を世に遣はし、我らをして彼によりて生命を得しめ給ふに因る。愛といふは、我ら神を愛せしに非ず、神我らを愛し、その子を遣はして我らの罪のために宥めの供物となし給ひし是なり。愛する者よ、かくの如く神我らを愛し給へり。……未だ神を見し者あらず我ら互に相愛せば、神われらに在まし、その愛も亦われらに全うせらる。神、御霊を賜ひしに因りて我ら神に居り、神我らに居給ふことを知る。(ヨハネ一書四・七—三)

ヨハネ第一書四・七—一三は神の愛を語って完璧な聖句で、これ自体が天来の靈風であり、靈歌である。読者は聖書をひらき、たましいをこめて音読し、祈り心を以て黙読せられよ。神・キリストの愛迫り来たり、全身これ神・キリストの愛で火の如くなろう。「愛は神より出づ」、これは絶対的な一言である。それが恋愛であらうが、親子愛、師弟愛、夫婦愛、兄弟姉妹愛、友愛、凡そいかなる愛でも「愛は神より出づ」の大前提、太源あるときに始めて永遠性、生命性を有つことになる。唯この一事を銘記せん哉！

12月25日

「視よ、我れ戸の外に立ちて叩く」
(ヨハネ黙示録：七つの教会 1-3)

○今在まし、昔在まし、後來たり給ふ者、主なる全能の神いひ給ふ
『我はアルパ也、オメガ也』汝らの兄弟にして汝らと共にイエスの
艱難と国と忍耐とに与る我ヨハネ、神の言とイエスの証との為にパ
トモスといふ島に在りき。われ主日に御霊に感じたるに、我が後
にラッパの如き大なる声を聞けり。われ振り反りて我に語る声を見
んとし、振り反りて見れば七つの金の燭台あり。また燭台の間に人
子の如き者在ます。…「懼るな、我なり、最先なり、最後なり」…
○視よ、我れ戸の外に立ちて叩く、わが声を聞きて戸を開かば、我
その中に入りて彼と共に食し、彼も亦我と共に食せん。勝者には我
と共にわが座位に坐することを許さん。(黙一・八：一七、三：二〇、二二)

○いよいよ最終の巻「黙示録」(本当は「顕示」録の意である)に入る。「今在ます者」、
この現在者は過去を有ち将来を有つ永遠の現在者。創造の元始と完成の終末を有つ永遠者
とキリストから。ヨハネはドミティアヌス帝(八一―九六年)の迫害時を背景として、エ
ーゲ海の小さなパトモス島(エベソの南西九〇軒)でこの黙示を受けた。小アジアの七つ
の教会(第二、第三章)に使信を書き送る。魂の扉を叩き給うキリストを迎え入れて言霊を
食せん哉！(頁数の関係で解説の余白が乏しいので読者は黙示録をよく読んで下さい)



(黙3：20，21)「視よ、我戸の外に立ちて叩く」

12月26日

血の復讐、羔の怒、羔の血

(黙示録：七つの封印4-7)

○「^{六・一〇}聖にして真なる主よ、いつまで審判^{さば}かずして地に住む者にわれ

らの^{六・六}血の復讐をなし給はぬか」(黙示録六・一〇)

○山と岩とに^{七・四}対ひて言ふ「請ふ……羔の怒より我らを隠せ。……誰^{二七}

が立つことを得ん」(六・一六、一七)

○……「彼らは大なる患難より出で来たり、羔の血に己が衣を洗

ひて白くなる者なり。……御座に坐し給ふ者は彼らの上に幕屋を張

り給ふ。彼らは重ねて飢えず、重ねて渴かず、日も熱も彼らを侵すこ

となし。御座の前に在ます羔は、彼らを牧して生命の水の泉に導き、

神は彼らの目より凡ての涙を拭ひ給ふべければなり。」(七・一四……一七)

○東西古今、いかに多くの個人、家族、村落の民衆、奴隸たち、弱者たち、信徒たちが、権力者、上役どもの奸策により不當極る処置、裁断、迫害のために血を流したことか。その血の復讐のための血の叫びは断えない。歴史の終末まで。併し彼らは天界に、迫害者らは地獄にいる。

○「羔の怒」、温和なる羔が怒ると獅子も震える。羔はキリストである。一切の不当なる権勢者たちは「最後の審判」を待つまでもなく、仮地獄の中にいる。ダンテの「地獄篇」。○七・九―一七は諸々の人生の艱難に遭った人々へのあつい慰めの聖句である。バラダイスでの彼らの歓喜にかばかりぞや。彼らは感激の嬉し涙を流すであらう。

12月26日

天界の幕屋 作詞1980. 10. 16

ヨハネ黙示録第7章に因みて
歌調「美しき天然」田中穂積作曲

起句：「空にさへづる鳥の声」

天界の幕屋

1

羔^{こひつじ}の血を 身に浴びて
あがなはれたる 白き群、
苦難^{くるじやう}経たる 生涯^{いのち}ゆえ
栄光^{さかみち}ゆたけき 御座^{みぎ}の許^{もと}。

2

神の幕屋の 張られたる
その天然の 霊泉^{とくしん}に
渴^{いのち}きを知らぬ 永遠^{とこしよ}の
生活^{いのち}たのしむ パラダイス。

3

数えつくせぬ 国民^{こくたう}の
星と散らばる 幕屋かな
類は相呼び 集りて
主のエクレシヤ（召団）ここに成る

4

我らも地にて 聖名ゆえに
十字架を負ひて 生き貫かん、
み霊の光 身に浴びて
主のみ生命を 身証^{みかこ}せん。

12月27日

羔の君と十四万四千人

(黙示録14: 1-5)

二四二
われ見しに、視よ、羔シオンの山に立ち給ふ。十四萬四千人これと偕に居り、その額には羔の名及び羔の父の名記しあり。彼ら新しき歌を御座の前にて歌ふ。彼らは人の中より贖はれて神と羔とのために初穂となれり。その口に虚偽なし、彼らは瑕なき者なり。二四・一―五

ヨハネはエベソ教会で永年牧会をしていたが、彼がバトモス島で觀且つ聴いた黙示は何たる神秘の啓示であるか。七つの燭台を以て象徵されたるものは七つの教会であつた。小アジア半島の西海岸沿いの面から北へエベソ、スミルナ、ベルガモの三教会と之に略並んで陸地帯を北から南へテアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤの四教会への使者を受けたあとで、羔の君が七つの封印の巻物の封印を次々と解く度に色々な啓示があり、次に七人の御使が七つのラッパを次々に吹くことになる。その第七の御使がラッパを吹いて最初に現はれたのが、この一四・一―五のシオンの山の羔と十四万四千人。

素晴らしい立琴の大合奏の伴奏の中に響いて来たのは新しき歌の斉唱である。その十四万四千という象徴的な数(完全数十二の自乗の千倍)の初穂的な、一粒の麥的な魂の中にはアブラハム、モーセ、サムエル、エリヤ、エレミヤ、第二イザヤ、ヨハネ・バプティスト、ピリポ、ステパノ、パウロといった魂がいたに相違ない。その他今日まで同種の魂が天の川の星の如くこれに参じ入れられたことであらう。

12月28日

ハル・マゲドンの戦

(黙示録16: 1-16)

一六・二三

第六の者その鉢を大河ユウフラテの上に傾けたれば、河水涸れた^かり。これ日の出づる方より来たる王たちの途を備へん為なり。我また龍の口より、獣の口より、偽預言者の口より、蛙の如き三つの穢れし霊の出づるを見たり。これは徴を行ふ悪鬼の霊にして、全能の神の大いなる日の戦のために全世界の王等を集めんとて、その許に出でゆくなり。かの三つの霊、王たちをへブル語にてハル・マゲドンと稱ふる処に集めたり。(黙示録一六・一三-一六)

ヨハネへの靈幻靈声はその後もいろいろあったが、七人の御使に「往きて神の憤りの鉢を地の上に傾けよ」という声があつて(二六・二)、逐一、鉢が獣(暴君)の上、地の上、海の上、河と水源の上、太陽の上、第六の者がその鉢を大河ユウフラテスの上に傾けた。すると右掲の如き奇怪なサタン軍の悪霊どもが立ち現れた。それが全世界の権力者どもを集めんとて出で行った。悪魔の三位一体的な三つの悪霊がハル・マゲドン(「メギドン山」の意)(王下二三・二九、歴代下三五・二〇-二六参照。特にユダの名君ヨシア(王下二三・二五)がエジプト王の言に逆つて立ち向つたために戦死したのがメギドンの谷であつた悲劇的故事があるが、ハル・マゲドンはこれに因んだ象徴的な決戦場を意味する。日本史の関ヶ原の戦を連想する。謂はば、サタン軍の優勢な世界史に於て、神の軍が復讐的な最後の決戦をサタン軍に対していどみ、これを潰滅させる。この戦がハルマゲドンの戦で、その後に来る「千年王国」と「バビロンの壊滅」が新天地を迎える序曲となる。

12月29日

羔の婚姻

(黙示録19: 1-21)

一九・六 われ大なる群衆の聲洪水の音の如く、烈しき雷霆の聲の如きを聞けり。曰く「ハレルヤ、羔の婚姻の期至り、すでにその新婦みづから準備したればなり。彼女は輝ける潔き細布を著ることを許されたり。この細布は聖徒たちの義しき行為なり」御使また我に言ふ「汝書き記せ、羔の婚姻の饗宴に招かれたる者は恵福なり」と。(黙示録一九・六―九)

第七の者がその鉢を空中に傾けると、聖座から大いなる声が「事すでに成れり」と呼んだ。この世の権勢と邪惡の象徴なる大なるバビロン、大淫婦の審判が終り、血の復讐は成り、御座から声が響いて来た、「すべて神の僕(婢)たるもの、神を畏るる者よ、小なるも大なるも、我々の神を讃め奉れ。」そして更に右掲の如き大群衆の叫び聲が轟いて来た。神の国の到来の華たる「羔の婚姻」即ち、キリストと神の民の婚姻という表現を以て表はされる愛と歡喜の大婚礼大饗宴的な期の到来であり、神に栄光の帰せられる大讚美の饗宴である。この饗宴に抱かれた者たちは皆地上で苦難の道を歩み、夫々の路に於ておのが使命を果し、何らかの内容を以て真理の証を身を以てたてた人々である。何もキリスト者に限らない。神の民の範疇の広さ深さを誰か知らんや。視よ、白馬に乗った人を！ その眼光は炎の如くであり、その名は「神の言」と称う。彼は「王の王、主の主」(二九・一二―一六)。正に神の言なる羔と全歴史全世界の神の民なる新婦との婚姻である。

12月30日

神の幕屋

(黙示録21: 1-8)

三二
われまた聖なる都、新エルサレムの夫のために飾りたる新婦の如く準備して、神の許を出で、天降りするを見たり。また大いなる聲の御座より出づるを聞けり。曰く「視よ、神の幕屋、人と偕にあり。神、人と偕に住み、人、神の民となり、神自ら人と偕に在まして、^四彼らの涙をことごとく拭ひ去り給ふなり。今よりのち死もなく、悲歎も號叫も、苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去れり。

(黙二・二一四)

いよいよ輝しき啓示のフィナーレである。新天地の靈幻である。聖都が花嫁の如く装うて天降りした。右掲の聖句の単純にして何ぞ深きや。「神の幕屋、人と偕にあり。神人と偕に住み、人神の民となり、神自ら人と偕に在まして……」人とは誰か、最も人らしき人々である。誰かこれを限定し、説明し得ん。神知り給う(詩二三九篇)。最早いかなる苦しみ悲しみの涙もない。あるはただ神・羔への感謝、感激の涙のみ。聖都の石垣や礎石はみな宝石宝玉である。

ヨハネに啓示された神の都、神の国の幻影はすばらしいが、みな象徴である。人類の地上の歴史の終末のあとに現る新天地の神の国の現実には誰か知らん。神深く是を秘め給う。

12月31日

「然りわれ到らん速かに！」
 ナイ・エルコマイ・タクー
 —キリストの再臨—
 (21: 9—27; 22: 1—21)

○われ都の中に宮を見ざりき。主なる全能の神及び羔はその宮なり。都は日月を要せず、神の栄光これを照らし、羔は燈火なり。

○御使また水晶の如く透徹れる生命の水の河を我に見せたり。この河は神と羔との御座より出でて都の大路の眞中を流る。河の左右に生命の樹ありて、十二種の実を結び、その実は月毎に生じ、その樹の葉は諸国の民を醫すなり。(二二・一、二)

○われはダビデの萌生またその裔なり。輝ける曙の明星なり」御

霊も新婦も言ふ「来りたまへ」、聞く者も言へ「来たり給へ」。

○これらの事を證する者いひ給ふ「然り、われ到らん速かに」アーメン、来り給へ、主イエスよ、(二二・二〇)

神の都には神殿が見当らなかつたとヨハネは告白している。「主なる全能者たる神及羔がその宮であるという。会堂もないだろう。神の民そのものの多くの小さき群(ルカ二・三三)がエレクシヤ(教会、幕屋、召団)であるにちがいない。また聖都には日月が要らない。神の栄光がこれを照らし、羔の君自身が燈火であり、日、月、星辰であるという。何たる驚くべくも快哉なる神秘の現実かな。都大路に清水が流れ、生命の樹があつて生命の糧たる果実と葉がある。何たる天界のイエスの黙示かな！ 羔の君は「速かに往くぞ！」と約束し給う。我らも「速く来て下さい」と祈り入る。アーメン、ハレルヤ。

12月31日

(詩) 羔の婚姻 (黙：19-22) 作詞：1984, 9, 4

歌詞：一高寮歌「あゝ玉杯」

羔の婚姻

1

救済と栄光 神のもの
御審判義なり 真理なり
神の僕ら 報はれぬ
血の復讐は 果たされぬ
ハレルヤアーメン 僕たち
全能の主を 讃美せり

2

忍び待ちたる 時機は来ぬ
羔イエス 今こそは
エクレシヤなる 花嫁と
婚姻の座に つぎ給ふ
幸の極みの 時は来ぬ
み国の晨 明け初めぬ

3

嗚呼歓喜の 徒輩よ
聖名を讀へん 羔の
婚姻の時期 遂に来ぬ
新婦今や かがやける

4

細布を着て 備へせり
そは聖徒らの 行爲なるぞ
白馬に騎れる 神の人
炎の如き 眼の光
衣の色は 血潮なり
「神の言」は その聖名ぞ
白き細布 まとひたる
天の大軍 従へり

5

騎士の口には 利き剣
その聖手の中 鉄の杖
神の烈しき み怒の
血の酒槽を 踏み給ふ
その聖衣の 文字は是れ
「王の王」なり 「主の主」なり

6

われまた見たり み使の
日影の中に 立ちたるを
彼れ叫びたり 「鳥どもよ

12月31日

(詩) 羔の婚姻 (黙：19-22) 作詞：1984, 9, 4

歌調：一高寮歌「あゝ玉杯」

- | | | |
|--|--|--|
| <p>9</p> <p>我れまた見たり キリストと
神の言を 証して</p> | <p>8</p> <p>我また見たり み使の
鍵と鎖を たづさえて
蛇なるサタン うち捕へ
陰府に投げ入れ 封ぜしを
千年の間 悪魔より
諸国の民を 護るべく</p> | <p>7</p> <p>われまた見たり 獣らと
地の権勢と その魔軍
白馬の騎士と 天軍に
挑みかかれる 決戦を
ハルマゲドンの この戦
サタンの魔軍 敗れたり</p> |
| <p>12</p> <p>「神の幕屋は 人と偕</p> | <p>11</p> <p>ああ開かれぬ 新天地
聖なる都 エルサレム
新婦の如 準備して
神のみ許ゆ 天降りせり
大いなる声 聖座より
出づるを聞きて 歓喜せり</p> | <p>10</p> <p>千年王国 終りたり
ここにサタンは 放たれて
ゴグとマゴグを いざないて
悪の軍旅を 集はしめ
聖徒の陣営 囲みしが
神の火魔軍を 焼き尽す</p> |
| | | <p>神の族を 苦しめし
王侯代官 もろもろの
悪の徒輩の 肉を喰へ」</p> <p>カイザル礼拝 拒みたる
殉道の士が よみがえり
千年の間 キリストの
栄光のみ座に 侍べれるを</p> |

12月31日

(詩) 羔の婚姻 (黙：19-22) 作詞：1984, 9, 4

歌調：一高寮歌「ああ玉杯」

13

神は今こそ 靈止の中
人は今こそ 神の民
神は自ら 人に住む
今や死も無く かなしみも
くるしみも無し 涙無し」

14

聖なる都 エルサレム
その光輝は 碧玉か
都の城の 石垣に
十二の門あり その上に
十二支族の 名を記す
十二の使徒の 名は礎石に

16

都の内に 宮を見ず
全能の神 羔は
天つシオンの 宮なるぞ
ああ日も月も 照らすなし
神の栄光ぞ 光なる
羔はその 燈火よ

15

神の都の 石垣に
基を見よや さまざまの
光かがやく 宝石よ
あな美はしや み空なる
虹の光の 結晶か
十二の宝玉の 石垣よ

17

都大路の 真中には
水晶の如 透徹る
生命の水の 河流る
その両岸に 樹々ありて
十二種の実を 結ぶなり
その樹々の葉も 妙葉ぞ

12月31日

(詩) 羔の婚姻 (黙：19—22) 作詞：1984, 9, 4
歌詞：一高寮歌「あゝ玉杯」

18

「この書の預言 封するな
不義をなす者 不義をなし
義に生くる者 義に生きて
黒白あらはに 現はれて
神のみ民と 陰府の子の
別るる時期は 迫りたり」

アーメン イルクー クリエ
イエス！」

ハレルヤ！

19

「視よ速やかに 我れ到る
おのが衣を わが血にて
洗ひし者に 幸あれよ
われはダビデの 萌生よ
輝く曙の明星よ
我れ速かに 到るべし」

20

聖霊も新婦も 叫ぶなり
「新郎イエス 来たりませ！」
「われ速かに 到るべし」
「アーメン主イエス 来りませ」
天地に木霊す「マーラナタ、

●著者略歴

一九〇四年東京生れ。高師付属小学・中学出身。旧制水戸高校、東大文学部独乙文学科卒（一九二九年春）。東幼・陸士・陸大教授歴任。終戦後一高・東大教授。その間断続的に昭和医専・医大・早大・東歯大等の講師。一九六一・六二年西独ハンブルク大学の日本学交換教授。東大停年退職後、独協大学教授兼独協中学・高校第十四代校長。一九七九年春、五十年間の教職を退く。西ドイツ政府から第一級功勞十字章を授かる。現独協大学名誉教授。

内面史、水高・東大時代から内村鑑三・藤井武・塚本虎二の聖書集會に相前後して列席。一九四〇年から武蔵野市の自宅で日曜聖書講義を開いて今日に至る。一九五〇年秋、十字架・聖書の本格的体験以来、使徒的次元の原始キリスト道を唱道し、日本キリスト召団を結成。独立伝道者にして詩人。

著作活動、皆て「旧約知識」誌、「キリスト教常識」誌の同人。後に「彌野の愛」誌、「彌愛新書」及び「エン・クリスト」誌の主筆。そしてこの「小池辰雄著作集」の著者。訳書は、白水社版の「眠られぬ夜のために」（ヒルティ著作集第四巻）、「神と人間の実在的弁証法」（ヘルジャーエフ著作集第六巻）等。

◎一九八八
小池辰雄著作集 第十巻

聖書は大ドラマである

初版印刷 一九八八年十一月一日
初版発行 一九八八年十一月十日

著者 小池辰雄

発行 小池辰雄著作刊行会

東京都武蔵野市吉祥寺東町
四ノ一五ノ一九（一八〇）
TEL 〇四二二〇三四三三
（振替） 東京五十一六一三一八

（責任者） 奥田昌道

印刷・製本 中央精版印刷株式会社
装幀 前野洋一

頒価 三五〇〇円（送料不要）

●小池辰雄著作集（全十巻）

頒価、各巻三五〇〇円（送料不要）、分買自由。

- | | | |
|-----|-------------------|------|
| 第一巻 | 無者キリスト（一九七五） | （四版） |
| 第二巻 | 芸術のたましい（一九七六） | （再版） |
| 第三巻 | 無の神学（一九八二春） | （初版） |
| 第四巻 | 詩篇珠玉集（一九八〇） | （再版） |
| 第五巻 | 百世の師ヒルティ（一九七七） | （再版） |
| 第六巻 | 随想集（一九八二暮） | （再刊） |
| 第七巻 | 聖書の人ルター（一九八四） | （初版） |
| 第八巻 | 詩歌集（一九八六春） | （初版） |
| 第九巻 | 感想と紀行（一九八七春） | （初版） |
| 第十巻 | 聖書は大ドラマである（一九八八秋） | （初版） |

口座番号	東京 5—6 1 3 1 8
加入者名	小池辰雄著作刊行会

●申込みは郵便振替にて